情報教育コース専門教科，現代職業論 ： 人間社会デザインコース専門教科、キャリアデザイン論Ⅱ
担当教員：寿　卓三（松野尾裕先生、中西典子先生と３人で担当：寿担当部分の評価）

現代職業論・キャリアデザイン論Ⅱ

哲学・倫理学・寿　卓三

Ⅰ　受講状況（アンケートへの回答数）

２回生９名　３回生以上 11 名

Ⅱ　アンケートの結果

問１　出席状況（a>b>c>d>e）（2 回生/3 回生）
　a 5/4　b ３/６　c 1/1　d 0　e 0
問２　授業への取り組み
　a 4/2　b 5/8　c 0/1　d 0　e 0
問３　授業のテーマ・目的の明確さ
　a 2/4　b 4/6　c 3/1　d 0　e 0
問４　寿の学生への対応
　a 5/8　b 3/2　c 0　d 0　e 0
問５　授業への寿の熱意、工夫
　a 4/8　b 5/3　c 0　d 0　e 0
問６　授業の内容、レベル
　a 0/4　b 6/6　c 2/1　d 1/0　e 0
問７　授業により培われたり、得たもの
　a 5/6　b 4/5　c 0　d 0　e 0
問８　この講義のおすすめ度
　a 2/6　b 6/4　c 1/1　d 0　e 0
問９　この講義のよかった点
・色々な学生の意見を聞くことができた
・普段考えることから逃げている面に切り込んでいて、考えるきっかけを与えてもらった。
・就職に関する意見を他の学生から得られたこと。現代社会の様々な問題に気づき、考える事ができたこと。
・理想を語るだけじゃなく、現実をふまえてくれたところ。
・授業コメントに返事をしてもらえることはとてもよかったと思います。
問１０　改善すべき点
・できれば 15 回同じ先生の講義にしていただき、回数を重ねて知識を深めたかったです。また、寿先生のお話にたまに理解しきれないところがありました。難しいという意味ですが、それを質問する時間なども設けていただけると嬉しいかなと思います。授業の合間に先生に「分かった？」と聞いていただけると、学生の意欲も上がるのでは…とも思います。
・コメントはメールよりも手書きの方が良いと思います。
・板書が読みにくかった。
・就活はまだ先という甘い考えがあるからだと思うけれど、講義の内容が難しく考えているように感じられた。共感もできたが、やはり自分にはレベルが高いような気がした。自分自身の反省点でもあるともいえます。
・いろいろな話がうずまいて展開する中で、いかに自分の考えを持てるかが大変でした。
・もう少し、リアルな職場の声を聞きたかった。

Ⅲ　授業評価を受けて

最初にお断りというか，言い訳をしておきますと、私は最初、２、３回生合同の総合人間形成課程向けのこの講義と、学校教員養成課程社会科専修向けの哲学のアンケートをとって両者を比較検討する予定であった。というのも、まずこの講義において、同じ総合人間形成課程とは言え、コースを異にするだけではなく、２、３回生という学年をも異にする学生対象の講義において、学生の反応の異同を比較してみたいと思ったからである。また、哲学Ⅰの講義では、社会科専修向けの講義であるが、社会科専修以外の教員養成課程の学生の他、人間社会デザインコースの学生も多数参加しており、学生の所属による反応の異同を比較できると考えたからである。しかし、このもくろみは､2 月 17 日水曜日が月曜日の授業日になっていたことを亡失していたために哲学Ⅰの講義が開講できずに実現できなかった。また、アンケートを実施したこの講義も 2 月 18 日の大学院入試当日で元来が講義日でないことや、3 回生の就職活動とも重なって出席者が少ない状況であった。このように幾重もの、私の判断ミスが重なり、計画していた比較考察ができず、きわめて問題のある授業評価およびその考察になってしまったことをお詫びしておきます。

⑴　学びからの逃走、学力低下への対応

数学者上野健爾によれば、大学合格のみを目的とする受験生は、勉強することの意味を忘却しているだけでなく、小学校以来基礎が十分に理解できないままに受験勉強を行うので、受験技術ばか

りをみがくことになる。その結果、高校生、大学生は「学力低下」という犠牲を支払わされることになる。しかし、このような事態の真の問題は、「この大学生が社会人になると、再びこの構造を強化する方向へ動いていくことである」。なぜなら、教育に情熱を持って先生になることを希望する学生が、「僕は分かりやすく教えて、できない子の偏差値を上げていい大学へ入れてあげたい」と真剣に考える現状は、「学力低下」を生み出す構造が拡大再生産されていることを如実に物語っているからである（上野健爾、大野　晋『学力があぶない』、岩波新書、2001 年、62 頁参照）。論理に多少の決め付けと単純化が見られると考えるが、大学教育の抱える問題の淵源が奈辺にあるかを端的に示しているであろう。ドクサからエピステーメへの飛躍、そして身近な親密圏の問題と社会的公共的問題とを統合的に把握する知性、この 2 点の必要性を学生に自覚させること、それが大学教育の基本課題と考える。

⑵　本講義の原理的問い

では、現代職業論・キャリアデザイン論Ⅱは、この基本課題にどう立ち向かうのか。

社会の選抜システムが飽和状態を迎えた現在、私たちの社会では、責任感を持てないエリートと将来に希望を持てない現場の組み合わせという二極分化が進行し、種々のとんでもない偽装や事件・事故が生じている。とりわけ、非典型労働者は、単純に、価値あるものから疎外されるだけでなく、自らの仕事がそもそも普遍的な価値・使命 X とつながっているという感覚を持ちえないし、持つことを許されない状況下にある。もちろんこのことは、給与の高さや管理職への昇進ということをその労働意欲の源泉とせざるを得ない多くの正社員にも大なり小なり妥当する。理想や夢が破れて、不本意な状況に陥ったとき、それにもかかわらず人生を放棄するのではなく、この受け入れがたい自分を受け入れ、存在論的な不安に耐えて前向きに自分の人生と向き合うにはどうすればいいのか。まさにこのような課題に応える力を涵養する上で、〈教育〉は何をなし得るのか。社会に出て行こうとする学生に向かって、この講義は何を伝えるべきなのか。

⑶　この講義での試みと今後の課題

さて、この講義は松野尾裕先生、中西典子先生の講義を受けて、最後の 5 回を寿が担当するものであり、その評価は私の担当部分に対する評価である。講義の展開は、以下のようなものであった。

Ⅰ「仕事」の意味―
Ⅱ「労働」の現場―「への疎外」からの疎外―
Ⅲ「仕事」の現実
Ⅳ「就職迷子」からの脱出に向けて 1
Ⅴ「就職迷子」からの脱出に向けて 2

この内容を 5 回の講義で展開する予定であったが、第 1 回の講義に対して、ある受講生が、6850 字に及ぶコメントというか論文を出してきたので、この論文に関する議論に 1 時間あてた。そのため、Ⅳ、Ⅴはまとめて 1 回とした。授業へのコメントを毎回メールで提出させているが、講義の終わりに手書きでという意見もある。メール形式をとるのは、授業後に講義の内容を消化する時間を確保してほしいと考えるからである。

さて、普遍的な価値・使命 X とつながりながら、「はたの人を楽にする」働くという営みは、単に市場の経済活動において有能であることを意味しないはずである。市場の外にたたずんでケアされるだけの人、未だ市場取り引きに参加できない人、さらには未だ生まれていない人、彼らの聞こえない、ひそやかな呟きに耳を澄まして、その声を私の応答を求める呼びかけの言葉として受け取ることがまずは必要となるのではなかろうか。「仕事」の現実に即して、自他の声に耳を傾ける中で、先に述べた、ドクサからエピステーメへの飛躍、さらには、身近な親密圏の問題と社会的公共的問題とを統合的に把握する知性の育成を試みた。いまだ五里霧中というが実情であるが、レポートの中に次のような声があったことは私にとって喜ばしいことであった。

「私は、結婚せずに働き続ける女性も、仕事を辞めて主婦として働く女性も認められるべきだと思うし、仕事と家庭を両立させている女性の努力は素晴らしいと思うが、だからといって一番優れているとも思わない。メディアによって社会が求める望ましい女性像のようなものが作られがちだが、結局は個人が自分の生き方に納得しているかどうかだと思う。これは就職活動にも言えることだが、大切なのは周りから評価される「正解」を出すことではなく、自分の満足のいく「納得解」を出すことである。20 代の多くの女性が「仕事は生きていくための手段」だと割り切ることに対しても、否定はできないと思う。恋愛や結婚を優先することも構わない。しかし、仕事に重点を置けない理由の根本に、自分の納得できない何かがあるのなら、そこを変えていく努力は必要なのではないだろうか。」

社会の求める「正解」を否定せず、それと距離をとりつつ、自己や社会のあり方を地道に変えていく努力の中で「納得解」を築き上げようとする、しなやかでたくましい知性の誕生をここに読み取るのは、ひいき目に過ぎるであろうか。